

関根達人著

『あおもり歴史モノ語り』

工藤 清泰

本書は、本会員である関根達人さん（弘前大学人文学部・同大学院地域社会研究科准教授）が、平成一八年九月から同二〇年三月まで、朝日新聞青森県版に六〇回連載した同名の内容を一書にまとめ、秋田県の無明舎出版から上梓したものである。

筆者は、連載記事を毎週楽しみにしながらスクラップしていたこともあり、もう一度新聞記事と比較しながらスクラップしていたことも六〇話は、連載順に配置し、三六枚もの写真と改訂資料を追加しているが、本文の再編をした形跡はない。一般的に、毎週の締め切りに追われて連載を進めた場合、書き忘れたことを加筆し、年代順・地域別に再度まとめ直すことも多いが、それらをまったくしないで、巻頭に「本書の見所」だけを追加して一書にしている。このスタンスは、著者の新聞連載に懸けた意気込みを推し量るとともに、一話一話の中が極めて完結性の高い物語となっているために、再編成を必要としなかったものと思われる。

加筆した本書の「見所」として、関根さんは次の四点を指摘する。一 縄文時代、二 古代、三 中世・近世、四 身近な文化財であるが、前者三点は時代別の見所で、四点目は著者が弘前大学で文化財論を講義していることによる本音部分とみられる。特別史跡となり保存・保護の

手が増えられている三内丸山遺跡と比較した時、名もない遺跡や路傍にたたずむ石碑なども大切な文化財であり、一度失うと取り返しのつかない歴史的損失となると危惧する。見所の解説や連載のポリウムからみると、記述の中心的時代は中世・近世であり、以前、福田友之（現青森県考古学会会長）会員が平成一七年一月から一二月まで同紙に連載した内容が、あくまでも縄文時代にこだわった記述をしていたことを思い出すと、近年における考古学研究の時代幅の広がりを実感せずにはいられない。

紙幅の関係で、記述された全六〇話をすべて取り上げることは出来なにかわりに、筆者の興味を引いた話に触れることで、書評の責を果たしたい。

関根さんは、考古学の本質を物質文化の研究と位置づけ、物言わぬ一寡黙なモノから歴史のモノ語りを始める（第一話）。まさに書名の通りである。最初の八話までは、酒・煙草という嗜好品から進み、読者の関心呼び込みもうとする。第三話の表題は「晩酌はいつ始まった？」として、筆者も気になる話題である。結論としては、縄文時代はもとより中世では神事の盃事で、江戸時代になってある程度普及するものの、基本的には明治以降の徴兵制の後であるとしている。がしかし、第四・五話では貧乏徳利やコンプラ瓶の話から、江戸時代には相当の「呑み助」がいたことを匂わせており、ストレスやメタボに悩む現代人の思考回路は、案外江戸時代にルーツがあるのかもしれない。それにしても考古学は、酒を飲む器を探しながら、各時代の社会構造や人々の精神構造を探求してゆく学問の一面をみせる。

第一〇話以降は、墓・飢饉・アイヌという言葉が二〇話ほど続き、考古学の方法論を基本としながらも、民俗学・文献史学・人口学・民族学・生物学・植物学など多分野の研究成果を取り入れた内容となる。

特に、墓は考古学の独壇場である。現代人にとっては当たり前である、墓に墓石のある風景は、江戸時代以降に一般的になるのであって（第一五話）、縄文時代から古代・中世までは再葬・土葬・火葬などの多様な形態が存在し（第一〇話）、ハンセン病などの特殊な葬制（第一三話）、大名家の墓のあり方（第二一・二二話）、副葬される六道銭からは、蝦夷錦と同じように北回りルートによって清朝銭が渡来した可能性を推測（第一四話）するなど、生々しい発掘資料を提示している。

また、歴史研究者が持ち続けなければならない過去と現在そして未来への視座に対しては傾聴すべき点が多い。

たとえば、飢饉による人口減少を現代社会の少子化と関連させ（第一六話）、日本人の改革好き（最近の小泉改革か？）の一面をとらえ、弘前藩における乳井貢を中心とした宝暦改革では飢饉にも死者ひとりも出さずという「伝説的な改革」との不一致を、まさに旧市浦村の湊迎寺過去帳から現出（第一九話）し、飽食の時代には無縁と思われていた「飢饉」の話（第二〇～二四話）も昨今の資本主義経済における食料自給率低下から現実的問題となりそうな恐怖感を覚え、さらには日本を単一民族国家と認識することへの批判（二五話）など、痛快でありながらどこかボディーブローのように利いてくる歴史的格言をみる思いである。

さらに、執筆の方向は、これまでの歴史的「定説」の見直しへと向けられる。弘前藩成立時における大浦氏（津軽氏）関連の城館が移動（遷

移）している問題は、従来の種里城↓大浦城↓堀越城↓弘前城という連続的なものでなく、出土陶磁器の年代観から種里―大浦、大浦―堀越の二城体制も存在したとの提言（第三三・三四話）は重要である。

これは、城館が地域支配の拠点であるとともに経済的・文化的な防衛拠点であるとすれば、下克上を当然とする戦国の世にはバックアップ体制を構築しておくことが望ましい。津軽（北日本と言っているかもしれない）においては、戦国期になっても本拠の城館に対する防衛拠点である「山城」を構築しなかった豪族がほとんどであり、防衛に無頓着な地域性を有している。そのような中で大浦為信の示している本拠二城体制は、戦国社会を意識した結果とみられ、この考え方を経ずして津軽は近世に移行できなかったのかもしれない。誠に示唆に富む分析結果である。

また、つがる市館岡に建設された亀ヶ岡城の再検討（第三六話）、アイヌ社会を容認した旧体制派（安藤・浪岡・南部氏）に対し、近世大名へのし上がる津軽氏はアイヌ社会と対峙し、異民族支配に並々ならぬ力を注いでいるが、その動態は旧体制派の城館から出土するアイヌ文物（骨角器・ガラス・鐔の鑄型など）に対して、津軽氏側の城館にはアイヌ文物が一点も認められないことよって証明されるとする（第三一・三二話）。この箇所は、読み応え十分である。

私のように、津軽に生まれ、津軽で育ち、津軽から出たことがない人間にとって津軽家・弘前藩は、郷土愛を示す対象であり、冷静に歴史的分析の対象とするにはどこかはばかれる、精神的呪縛の中にあるといつてよい。その意味で、弘前大学に赴任して七年を経過した関根さんは、そのような「シガラミ」に左右されることなく、「青森」や「津軽」「下

北」「南部」を冷静な視点で見定め、現在はさらに「蝦夷地」「サハリ
ン」「大陸」までも視野に入れていっているらしい。

前記の話は、関根さんが貫いてきた研究スタイルをよく示している。

第四〇話以降は、北海道との関連も強く出てくる。下北風間浦村易国
間の大石神社に奉納された「福山城春望之図」絵馬（第四〇話）、松前
町法源寺に葬られた北方警備の弘前藩兵（第四一話）、蝦夷錦の話（第
四二話）、海峽を越えた土器の交流（第四三話）など、関根さん自身が
実見し、新たに発見した資料を使って執筆している。新たに発見した資
料は、関根さんの審美眼のなせる業でもあるし、モノに対する強いこだ
わりの所以であろう。

また、大鰐の周辺にみられる経塚と仏教文化（第三八・三九話）、平
安時代の瑞花双鳥八稜鏡（第四五話）、むつ市大畑の大安寺出土の一字
一石経（第四七話）、亀ヶ岡遺跡と佐藤蒨（第五〇話）、是川遺跡と泉山
兄弟（第五一話）、馬の絵のある土器（第五三話）、最北の須恵器窯（第
五四話）、縄文の赤の素材であるベンガラ（酸化鉄）（第五五話）、蝦夷
の「かなまり」（第五六話）、つがる市（旧車力村）にある高山稻荷神社
の神様たち（第五七・五八話）、悪戸焼（第五九話）など、一つ一つの
話の中に青森県における歴史研究の基本的な問題点を取り込んでいる。
そして最後に、文化財は先人の遺産（第六〇話）で終息することにな
る。ここで関根さんは、青森のように都から離れ辺境と呼ばれていた地
域は、近年の歴史学では境界領域とみなされ、異なる民族・国家をつな
ぐ独自の文化が見直されていると指摘する。さらに、三内丸山遺跡など
の世界遺産登録に進む社会の動きに対して、「大切な文化財を食いつぶ

すことは避けなければならない」と警鐘をならす。

さて、関根さんが語りかけた話の基礎は、弘前大学に赴任してから各
誌に発表した論文や学生とともにまとめた研究報告である。巻末に一〇
頁をさいて参考文献を載せているが、ほとんどは関根さんの執筆したも
のであり、研究者としての真骨頂を発揮している。それにしても関根さ
んの行動範囲の広さには脱帽である。地元の研究者でも本書の話題とな
った遺跡や神社・寺院・墓地・資料館・収集家宅などのすべてに足を運
んだ人はいないはずである。その意味で、本書は関根版青森歴史研究ノ
ートであり、研究の軌跡をたどるビジュアル冊子でもある。

ただおしむらくは、新聞に出たカラー図版が表紙カバー以外になく、
白黒写真に変更しているため、モノの臨場感に迫力がなくなっただけで、
とても残念なことである。また、無明舎出版側の手落ちであろうか、誤
植が各所に認められる。一三頁の「多民族藩」が「他民族藩」、一八三
頁の「第五一話」は本来「五〇話」、一九四頁の「八一話」は本来「五
三話」、表紙カバーの名前は「Sekine Tatsuhito」が正しいであろう。
二版における訂正を望むものである。

最後に、関根さんは新聞に執筆を始めた時、筆者に対して「文章の勉
強のために……」といったことを思い出す。ウエットに富んだ文章、歯に
もの着せぬ辛らつな社会批判、平易な中にも明解な論理、そして豊かな
歴史描写は、一年半の執筆期間に稔り豊かな穂となったようである。

（四六判、無明舎出版、二〇〇八年八月刊、価格一七八五円）

（くどう・きよひと 青森市史編さん室長）